様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２００４５

研究課題名（和文）創造的跳躍としての類比（アナロジー）－隠れた方法概念によるディルタイ哲学の再構築

研究課題名（英文）Reconstruction of Dilthey's Philosophy by the concealed method "Analogy" as a creative leap

研究代表者
山本　幾生（YAMAMOTO, Ikuo）

関西大学・文学部・教授

研究者番号：００２２０４５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,800,000円、（間接経費）　840,000円

研究成果の概要（和文）：　ディルタイの哲学はこれまで理解を方法概念とした解釈学の哲学とされてきたが、本研究は、これまで議論されることのなかった「類比」概念に注目し、ディルタイ哲学を再構築した。その主要な論点は以下の３点に纏められ、論文と著書で公表された。
　1．理解という方法概念も、帰納や演繹と異なり、個から個へ跳躍する類比によって形成される心的生の創造的な働きである。2．そして精神科学の客観性は、自然科学と異なり、類比による類似性そして類型によって保証される。3．したがって我々の歴史的世界は、歴史の進行とともに、未来への創造的跳躍を含みながら、常に類比的に形成し直されるのである。

研究成果の概要（英文）：　Dilthey's philosophy has been interpreted as a philosophy of hermeneutics by the concept "understanding (Verstehen) ". But this research gives attention to a concept "analogy" as a concealed method. The result is divided into three points and is published in essays and books.
　1.The concept "understanding" is formed as a mental action by the concept "analogy", which is different from the induction and the deduction and makes progress from an individual to another individual. 2. The objectivity of the moral sciences is convinced by a resemblance and a type, which is formed by the analogy. 3. Our historical world, which goes past and forward, contains a creative leap into the future in every epoch, and accordingly, our history itself is reformed by the analogy in every epoch.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：ディルタイ　類比　アナロジー　理解　歴史的世界　類型

１．研究開始当初の背景

ドイツで刊行されているディルタイ全集は、ディルタイの遺稿を第 19-25 巻（1982-2006 年にかけて刊行）に収め、2006 年に全 26 巻をもって完結した（第 26 巻は 2005 年に刊行済み）。そして 2011 年からディルタイ往復書簡集全 3 巻が刊行され始めた。これら遺稿の刊行によってディルタイの全体像が現れ、近年、従来のディルタイ解釈が修正あるいは根本的に見直され、彼の哲学の新たな再構築が試みられている。本研究もこのような研究動向を背景にしている。具体的には以下の通りである。

１）まず、従来のディルタイ解釈に対する近年の研究動向の具体的な内容は次の通りである。

従来のディルタイ解釈は、ボルノーの『ディルタイ』(1936)、『理解』(1949)などによって、そしてガダマーの『真理と方法』(1960)などによって形成されてきた。すなわち、ディルタイは、精神科学の基礎づけを目指して中期（1880 年代から 90 年代）に心的生の心理学的分析を試みたが、当時の心理学者によって批判され（特にエビングハウスによる批判）、このため晩年（1900-11 年）に、解釈学に移行し、これによって歴史的世界の構築を目指したのだ、と。

しかしながら、新たに刊行された遺稿によれば、心理学的分析は晩年まで行われ(第 24 巻)、解釈学の中心となる理解概念も、晩年に初めて語られたものではなく、最初期から、そして心理学的分析の中でも、しかも解釈学の重要性とともに、語られてきたのである。このことは、本研究で注目する初期論理学講義の中での J.S.ミルの批判的受容においても見て取れることである（第 20 巻)。したがって、従来の「心理学から解釈学へ」というディルタイ解釈は、根本から見直されなければならず、その見直しによって、彼が試みた精神科学の基礎づけと歴史的世界の構築という、彼の哲学全体の再構築が今日のディルタイ研究の課題となっている。

２）本研究の位置づけ

このような今日の研究動向の中で、ドイツでは、心理学と解釈学の関係を従来と異なる仕方で、つまり並列的に把握する試みが出始めた(フェールマン「解釈学と心理学」『ディルタイ年報』9 巻、1994/95)。国内でも『ディルタイと現代』(西村ほか編、2001)がディルタイの全体像に迫ろうとし、また最新の遺稿をも含めた日本語版翻訳全集『ディルタイ全集』(西村ほか編集代表、2003-)が刊行中である。

本研究代表者は、前者の著作では分担執筆者として、後者の翻訳全集では訳者(3 巻、2003)と編集校閲者(6 巻、2008)として携わり、2008-10 年度に科学研究費補助金による研究「新資料の基礎的研究によるディルタイ哲学の再構築-「現実と経験の哲学」として」を行い、その成果の一つとして、論文「ディルタイと J.S.ミル　-〈類比による連関〉と〈帰納による普遍〉」（2010)を著し、研究会等で批判的評価を受けた。この論文は、ディルタイが初期論理学講義の中で、普遍化を目指すミルの帰納法に反対して、どこまでも個々の経験に留まる類比を方法として挙げ、現実を個々の生起の内的連関として捉えようとしている点に注目したものである。そしてここから、彼の哲学の内実を「現実と経験の哲学」として再構築するのが、前回の科研費による研究の目的であった。

本研究はこれらを基礎にして、方法概念という観点に注目し、これまで解釈学の中心概念とされてきた理解概念をも、類比から再考することを目指している。特に英国経験論とりわけ J.S.ミルとの関係から類比を主題化してディルタイ哲学全体を再構築するという試みは、近年でもまだ現れていない。

２．研究の目的

このように、従来は理解概念が解釈学的方法概念として受け継がれて来たのに対して、本研究は、むしろ、従来は主題化されることのなかった「類比(アナロジー)」を〈隠れた方法概念〉として捉え、彼の哲学の再構築を目指した。具体的には次の点を解明することを目的とした。

１）まず、彼が初期論理学講義（1860/70 年代)のなかで J.S.ミルの帰納法に反対して類比を挙げている点に注目することによって、本研究は、類比には帰納・演繹にない〈創造的跳躍〉が含まれており、これが彼の〈表立った方法概念〉である心理学的・解釈学的な追体験・理解を形成しているということを解明する。

２）次に、本研究は、ディルタイ哲学の中期（80/90 年代）における精神科学の基礎づけから晩年（1900-11 年）における歴史的世界の構築が、その学的客観性を、ほかならぬ類比によって捉えられる類似・連関・類型に求めたということを解明する。

３）かくして本研究は、彼の哲学が、類比という創造的跳躍を根本とする追体験・理解によって、精神科学固有の客観性に基づく歴史的世界の創造的な構築を目指した哲学であったことを、初期から晩年までの資料に基づいて整合的に解明する。

以上の 3 点を解明によって、本研究は、ディルタイ哲学の再構築を目的とした。

３．研究の方法

したがって本研究は、いわば研究室内にあ

っては、ディルタイの遺稿を含む新資料を中心に、論理学・心理学・解釈学、精神科学の基礎づけ、そして歴史的世界の構築に関する資料を蓄積・整理し、その資料の整合的な、しかも従来の研究では気づかれなかった意味の分析を行い、その成果を論文・発表等として公表し、その批判的評価をフィードバックしながら進めるという方法をとった。

なかでも第三者による批判的評価という観点から、研究室外にあって、ディルタイ研究を牽引している日本ディルタイ協会と連携し、２ヶ月に１回程度を目途に研究会を開催し、専門的研究者による相互批判・評価を行い、それを本研究の成果に反映させるという方法で本研究を推進した。

また、本研究は研究期間が３年間であるため、それに応じて年度ごとの目標地点を設定し、全体で三段階のステップを踏んで研究全体の目標を達成するという方法をとった。具体的には、上記に挙げた三つの目的（２−１）、２）、３））を各年度に順次遂行していくという方法をとった。

４．研究成果

本研究は、以上の目的と方法によって、当初設定した上記の三つの目的に応じて、研究成果をあげた。その具体的な内容は以下の通りである。

１）第一の目的に関して次の成果を挙げた。

①まず、類比（アナロジー）は、ディルタイにとって、最初期の論理学講義の中で、人間の思考、したがって心的生の規則性を求める過程で、同じく心の出来事の規則性の発見を自然の出来事と同様に帰納法に求めた J.S.ミルを批判的に受容することによって概念形成されていったのである。

この点について、とくに英国経験論との関係について、従来の研究では、ディルタイが英国経験論における帰納法の影響から抜けきれなかったという評価がなされてきた。しかし、新たな遺稿によれば、決してそうではなく、ディルタイが帰納法に反対して類比をみずからの方法論の基本としていたことが明らかになった。

帰納や演繹が特殊から普遍を目指すのに対して、ディルタイはこの普遍への志向を徹底的に批判することによって、個から個へ進む心的生の類比的働きを方法概念に仕上げていったのである。これが彼の哲学の方法論の基本的枠組みとなったのである。

②したがって次に、個から個へ進む心的生の類比的な動きを基にしてこそ、ある個体（生）が他の個体（生）の体験を追体験し、理解することが可能になるのである。この点が明らかになった。

追体験は、みずから体験したことのない体験、たとえば他者がなした体験を、自己の体験から類比的に体験することであり、したがって自己の体験を超え出るという跳躍的創造を含んでいるのである。しかもこれは、従来誤解されてきたように、そしてこの誤解に基づいて批判されてきたように、ディルタイが他者の感情の理解に関して類比推論説を採用していたことを意味するのではない。むしろ、類比推論説は心的生の生き生きした類比的跳躍を思考によって抽象化することによって生じたものであり、ディルタイ自身は類比推論説を採用していたわけではなく、心的生の生動的働きの探求を目指していたのである。この点が本研究によって明らかになった。

③したがって解釈学の中で中心概念となる、他者の生そして過去の精神的世界、これらの理解もまた、類比的な跳躍として遂行されているのである。とりわけこの点が、従来の研究では見過ごされていた論点である。

それと同時に、類比的跳躍としての類比の解明で必要になるのは、現在的な心的生から他の心的生へ類比的に跳躍する力がどのような能力によるのか、この点である。ディルタイにとってそれは、理性能力でも悟性能力でもなく、想像力に求められていたのである。これもまた従来の研究ではさほど注目されていなかった点であり、この解明が、次年度以降の課題へ引き継がれた。

２）では、類比という観点から見るとき、まず、ディルタイが認識論的心理学的に遂行した精神科学の基礎づけは、どのように見直されなければならないのか。これに対して本研究は成果として次の論点を提示した。

①ディルタイにおける精神科学の基礎づけは、各個体（生）が生きている歴史的社会的現実の、認識論的・心理学的・解釈学的な分析を通して進められ、その学的客観性は、自然科学と異なり、類比によって得られる類似性そしてそこから形成される類型に求められたのである。すなわち、精神科学の客観性は類比による類型形成に求められたのである。

晩年に彼が提示した世界観の類型が精神科学の基礎づけとどのように関係しているのか、従来この点が必ずしも明瞭ではなかったが、類比という観点から見るとき、彼の類型そして世界観学もまた、学的客観性という点で精神科学の基礎づけの根幹をなしていたのである。

②ここから解釈学における理解に対しても重要な論点が帰結する。すなわち、個から個への類比的進行は、類型を形成することによって、類型に含まれる〈個〉と、他ならぬその類型を形成している〈全体〉、この両者の相互の連関を同時に形成していくことにほかならない。つまり、個から個へ進行することによって類型的な全体を形成しながら、同時に、その全体的な類型から個を再帰的に理解するのである。従来、解釈学で語られる個と全体の循環は、個から個へ進みながら類

型を形成する類比によってこそ形成されていたのである。
　こうした類比的な類型形成が、精神科学の基礎づけにおいては、規則的斉一的な構造連関と目的連関として、そして歴史的世界の構築では作用連関と世界観の類型として、さらには歴史的社会的現実の理解に展開したのである。端的に言えば、精神科学の学的客観性は、普遍ではなく、〈全体への個の妥当性〉に求められたのである。
　③ここから次の重要な点が明瞭になった。すなわち、ディルタイは、類比を根底にして〈個から個〉の理解を認識論的心理学的に分析するとともに、類型形成における〈全体と個〉の解釈学的循環を、伝統的な〈特殊と普遍〉という枠組への批判として提示しているのである。
　ここから、従来のディルタイ解釈に欠けていた重要な論点として次の点が明らかになった。歴史的社会的現実が全体としては完結せずに未来に開かれている以上、学的客観性は、ある時代ある社会という一定の範囲内での客観性に留まるのである。それと同時に、理解もまた決して普遍的に確定されるのではなく、時代の推移の中で未来に向けて完結することなく、しかも常に誤解に曝され、理解し直される、そうした可能性を持っているのである。

３）このように見れば、ディルタイの哲学は、心理学から解釈学へ方向転換したのではなく、歴史的社会的現実を認識論的・心理学的・解釈学的に、つまり三つの方法的局面から分析した哲学である。そして、その三つの局面を貫いている隠れた方法概念が類比にほかならないのである。
　そうであれば、次に、類比が現在的な自己の体験を超え出て他者の体験、あるいは過去の歴史的世界へ超出するときの能力はどのようなものか、この解明が必要になる。ディルタイにおいてこの能力こそ、初期の詩学論の中心となる想像力に求められたのである。これは字義通りに、像を形成する能力である。本研究ではこの点の解明について、次の成果をあげた。
　①まず、類比は、個体から個体への進行として、みずからの体験を超え出て、他の個体の体験を追形成・理解するとき、現在的な自己を超出して未知の世界へ創造的に超出する。これは知・情・意という心的生の働きからすれば、理性的悟性的ではなく、感受的と意志的な働きによって遂行されているのである。
　本研究はこの点について、ディルタイの哲学の中では、とくに初期から中期の詩学論を通して解明した。すなわち、ディルタイは詩人の想像力を、まさしく現在的な所与を超え出て類型的な像を形成しうる能力として捉えていたのである。
　したがって、すでにローディによって指摘されていたように、しかしさほど注目されてこなかったのではあるが、詩学論における想像力論が解釈学的理解の源となっていたのである。したがって、詩学論における想像力と解釈学における理解とを結びつけているのは、類比という心的生の感受的意志的な働きにほかならなかったのである。
　②このような想像力による創造的働きは、ディルタイの晩年における歴史的世界の構築に重要な論点を帰結させた。
　すなわち、ディルタイによる解釈学的な歴史的世界の構築は、当時の学問的状況の中で、とりわけヘーゲル以降の哲学を新たに形成しなければならない状況の中で、精神の絶対性あるいは普遍性を頼りにすることはできず、むしろ類比によってこそ、個々の生の出来事から出発し、個々のもの相互の作用連関を解明しながらその全体を歴史的世界として構築することになったのである。そして歴史的世界を構築する能力は、ヘーゲル的な理性ではなく、感受的意志的な想像力に求められたのである。
　③かくして、ここから次の点が明らかになった。すなわち、歴史は、絶対的精神によって完結・完成されるものではなく、常に未来に開かれ、したがって歴史的世界の全体は未完結的で不断に変動する。それゆえにディルタイが提示する解釈学は、一方で、個々の過去的出来事が全体形成の仕方に応じて、常に理解し直される可能性を含意しているとともに、他方で、未来に向けて歴史的世界を創造的に構築する可能性をも含意しているのである。これが彼の解釈学において従来の研究で見過ごされていた局面にほかならない。
　本研究はここからさらに進んで、われわれの日常でよく経験される理解不可能性（たとえば、他者を理解できない）あるいは誤解の可能性についても、想像力による類比的跳躍の一つの仕方として解明した。誤解もまた誤・理解として、したがって類比の過誤等として、類比に由来しているのである。
　このように、ディルタイの哲学における精神科学の基礎づけ、そして歴史的世界の構築は、自然科学的な普遍性を目指したものではなく、不断に誤解や理解不可能性に曝され、しかしまた、未来に向って創造的に理解し直す可能性を含んだものとして、その全体像が現れて来るのである。本研究が従来のディルタイ像に対して新たなディルタイ哲学の再構築として提示し得たものはこの点に集約される。彼の哲学は、一方では誤解に曝されて理解のやり直しを迫られ、他方では未来に向けて創造的可能性を含んでいる、この歴史的社会的現実を分析した哲学にほかならないのである。

　以上のように３年間を通して解明・提示した論点は、以下の「５.主な発表論文等」に示す発表・論文・著書として公開した。
　また、本研究は、ディルタイ・テキスト研

究会をほぼ２ヶ月に１回の割合で開催し、本研究期間の３年間で、第２１回から第３５回まで計１５回開催し、その成果として同研究会が主体となって以下「５.主な発表論文等」に示すように、「科研成果報告論文集・ディルタイ哲学の新たな切り口」を公表した。これは、執筆論文が８編（研究代表者２編、研究協力者６名各１編）、１編あたりが原稿用紙４００字詰めで１００枚程度、総頁数が A4 版 213 頁におよぶものである。これは当初の目的と方法で示した研究室外の研究として、また広くディルタ哲学全般の研究の推進として、大きな意義があった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①山本幾生、追形成・類比・追体験　―　ディルタイの想像力論に寄せて（下）、文学論集、関西大学文学部紀要、査読なし、第６３巻第２号、2013 年、1-32 頁。
②山本幾生、追形成・類比・追体験　―　ディルタイの想像力論に寄せて（上）、文学論集、関西大学文学部紀要、査読なし、第６３巻第１号、2013 年、19-39 頁。
③山本幾生、歴史的社会的現実の解釈学　―類比を視点にして、ディルタイ研究、日本ディルタイ協会機関誌、査読あり、第 23 号、2012 年、14-37 頁。
④山本幾生、ディルタイとヒューム　―〈連関の経験〉と〈観念の連合〉、ディルタイ研究、日本ディルタイ協会機関誌、査読あり、第 22 号、2011 年、80-96 頁。
⑤山本幾生、鏡の比喩　―　鏡を介して〈見える/見る〉世界、理想、理想社刊行、査読あり、687 号、2011 年、87-99 頁。

〔学会発表〕（計４件）
①山本幾生、ディルタイ哲学の新たな切り口、第３４回ディルタイ・テキスト研究会、科研研究会、2013 年 8 月 22 日、関西大学六甲山セミナーハウス。
②山本幾生、理解における個と全体の循環　―　その生動性と三つの推論形式（類比・帰納・演繹）、第３０回ディルタイ・テキスト研究会、科研研究会、2012 年 12 月 2 日、慶應義塾大学三田キャンパス・研究室棟１Ｆ・Ｂ会議室。
③山本幾生、学会シンポジウム提題：歴史的社会的現実の解釈学　―　普遍必然性に対抗して、ディルタイ協会全国大会「ディルタイ没後記念シンポジウム：ディルタイの遺産をめぐって」、2011 年 12 月 3 日、飯田橋・研究社英語研究センター会議室。
④山本幾生、ディルタイの想像力論考について」、第 22 回ディルタイ・テキスト研究会、科研研究会、2011 年 7 月 10 日、関西大学（千里山キャンパス）法文研究室棟・哲学合同研究室。

〔図書〕（計２件）
①山本幾生（編著）、廳茂、大石学、舟山俊明、伊藤直樹、走井洋一、瀬戸口昌也、科研成果報告論文集・ディルタイ哲学の新たな切り口、ディルタイ・テキスト研究会、2014 年、213 頁。
②山本幾生、現実と落着　―　無のリアリティへ向けて、関西大学出版部、2014 年、433 頁。

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ：
http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/~ikuoyama/lecture/DiltheyText.html

６．研究組織
(1)研究代表者
山本　幾生（YAMAMOTO, Ikuo）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：00220450